

|           |                           |
|-----------|---------------------------|
| 氏名 (生年月日) | 施 葉 飛 (1990年9月5日)         |
| 学位の種類     | 博士 (文学)                   |
| 学位記番号     | 文博甲第152号                  |
| 学位授与の日付   | 2022年3月16日                |
| 学位授与の要件   | 中央大学学位規則第4条第1項            |
| 学位論文題目    | 日本語間接関与構文の語用論的研究          |
| 論文審査委員    | 主査 藤原 浩史<br>副査 石村 広・大木 一夫 |

#### 内容の要旨及び審査の結果

##### 1. 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

##### 序章 はじめに

1. 研究対象
2. 研究目的
3. 本論文の構成及び各章の概要

##### 第1章 間接関与構文の問題点

1. はじめに
2. 間接関与構文に関わる基本概念及び問題点
  - 2.1. 間接関与構文のヴォイス性
  - 2.2. 間接関与構文の統語論的特徴
  - 2.3. 間接関与構文の意味・機能的特徴
    - 2.3.1. 抽象化の過程について
    - 2.3.2. 抽象化の結果について
3. 研究方法
4. 本章のまとめ

##### 第2章 授受動詞構文の非対称性

1. はじめに
2. 非意図的動詞事象構文化の非対称性

### 3. 考察

- 3.1. 問題Ⅰについて
- 3.2. 問題Ⅱについて
4. 中国語の授受構文との比較
5. 本章のまとめ

## 第3章 心理的移動構文の非対称性

1. はじめに
2. 移動構文
3. 心理的移動構文の非対称性Ⅰ：テイク形式の欠如
  - 3.1. 考察
  - 3.2. まとめ
4. 心理的移動構文の非対称性Ⅱ：非意図的用法の欠如
  - 4.1. 心理的移動構文の受影意味標示機能
  - 4.2. 前接動詞の制限
  - 4.3. まとめ
5. 本章のまとめ

## 第4章 間接受身構文の語用論的考察

1. はじめに
2. 間接受身構文の位置付け及び問題点
  - 2.1. 間接受身構文の位置づけ
  - 2.2. 間接受身構文の問題点
3. 用例調査
  - 3.1. 間接受身構文の述語動詞
  - 3.2. 間接受身構文の参与者
    - 3.2.1. 参与者の有生性
    - 3.2.2. 参与者の人称傾向
    - 3.2.3. 動作主の格標示
  - 3.3. 間接受身構文の復文傾向
4. 間接受身構文の成立
  - 4.1. 間接的な事態の把握について
  - 4.2. 日本語における間接受身構文の発達
5. 本章のまとめ

## 第5章 日本語間接関与構文の諸相及び成立原理

1. はじめに
2. 間接関与構文の諸特徴
  - 2.1. 構文的特徴
    - 2.1.1. 非意図的動詞事象の構文化
    - 2.1.2. 受け手の有生性傾向
    - 2.1.3. 待遇形式
    - 2.1.4. 極性
    - 2.1.5. 結果事象の焦点化
    - 2.1.6. まとめ
  - 2.2. 意味・機能、文体的特徴
    - 2.2.1. 「情意表出型」と「演述型」
    - 2.2.2. 利益と被害
    - 2.2.3. 受け手側視点維持機能
    - 2.2.4. 文体の特徴
  - 2.3. まとめ
3. 間接関与構文の成立原理
  - 3.1. 「方向性」による構文の非対称性
  - 3.2. 「主観的把握」と「私的領域」
4. 本章のまとめ

## 第6章 日本語間接関与構文のモダリティ性

1. はじめに
2. 「利益」と「被害」について
  - 2.1. テクレルの「利益」
  - 2.2. テクルの「被害」
  - 2.3. レル・ラレルの「被害」
  - 2.4. 「利益」や「被害」の発生
3. 間接関与構文のモダリティ性
  - 3.1. 間接関与構文のモダリティ性
  - 3.2. 間接関与構文のモダリティの位置づけ
4. 「利害性」の意味の表現方法の類型論的考察
5. 本章のまとめ

## 第7章 補助動詞の用法から見られた文法カテゴリーの連関

1. はじめに
2. 補助動詞の分類及び文法化
  - 2.1. 補助動詞の体系的分類
  - 2.2. 補助動詞の文法化
3. 補助動詞のモダリティ的用法
  - 3.1. 「利害性のモダリティ」とヴォイス
    - 3.2. 「利害性のモダリティ」とアスペクト
      - 3.2.1. テシマウについて
      - 3.2.2. テオクについて
  - 3.3. ヴォイス経由のモダリティとアスペクト経由のモダリティの違い
  - 3.4. 主観化制約
4. 本章のまとめ

## 第8章 おわりに

1. 問題点の確認
2. 各章の概要と問題点の回答
  - 2.1. 各章の概要
  - 2.2. 問題点の解釈
  - 2.3. 本研究の意義
3. 今後の課題
  - 3.1. 本研究の課題
  - 3.2. 第二言語教育への展開

## 2. 本論文の要旨

第1章は導入であり、先行研究を踏まえながら、「間接関与構文」に関わる次の3つの問題点を提示する。

問題点1 ヴォイスとしての構文の使用実態に関する記述が不十分である。

問題点2 間接関与構文の成立に関わる「無関係な動詞事象の関与」の統語的実現の条件説明がなされていない。

問題点3 間接関与構文の「受益」と「被害」の意味の発生背景、そして、一つの構文における異なった文法カテゴリーの接点の解釈が十全になされていない。

この問題点の解決を本論文の目的として提示する。

第2章では、テクレル授受構文を中心に論ずる。非意図的動詞事象の授受動詞構文化に焦点を当てて、求心型授受構文と遠心型授受構文との違いを中心に、語用論的な観点から考察する。非意図

的な動詞事象を構文化する際、主に授受の方向性の違いによって、非対称が生じ、求心型のテクレル・テモラウが遠心型のテヤルより発達していることを用例調査によって検証し、次の結論を得ている。

I 求心型授受構文が比較的に発達している要因は、現代日本語の視点構図や会話モードとの相互作用による。

II テクレルに比べて、テモラウの非意図的動詞接続が抑制される要因は、モラウの語彙的意味にある「働き掛け」と「受影」の併存性による。

第3章では、テクル型移動構文を中心に論ずる。まず、移動系補助動詞用法に見られる「心理的移動構文」に、二つの非対称性があることを指摘する。

I 形式の面ではテクルのみが発達しており、テイクの用法は発達していない。

II 意味の面では意図的な動詞事象しか取れないか否かに差異が生じる。

移動構文によって実現される間接的な事態に対する心的態度は、話し手側の視点からは捉えやすいが、非話し手側の視点から捉えることは語用論的な原則に違反するものである。心理的な移動構文においても、求心型の卓越を指摘する。

第4章では、間接受身構文について論ずる。従来の研究では、「間接的な事態の把握」、「現代日本語の中で発達している背景」などの問題が未解決であるが、用例調査によって、本構文が構文・意味レベルでの説明のみでは精密に捉えられないことを確認する。間接受身構文は、「事態」と「受け手」の間には格関係が存在していなくても、両者の関係づけを主観的に把握するものであるが、それは日本語に「求心性を心理的に運用する視点が存在する」という語用論的な原則があることによって成立すると指摘する。間接受身構文は、中国語など他の言語ではほとんど発達していないが、この差異は言語の視点構図の差異に由来することを主張する。

第5章では、以上の間接関与構文の分析をまとめ、その成立原理を論ずる。間接関与構文は、起こった事態について、話し手の心の中での評価を表出する文脈に出現するものである。すなわち、事態の「主観的把握」があり、話し手側へ向かう「求心型」構文に親和することを指摘する。本論文の問題点1・2に対して、語用論的な解釈を与える。

第6章では、間接受身構文の意味である「利益」や「被害」の意味を確認し、その意味が発生する背景を間接受身構文の通時的発達から考察する。間接関与構文は、「求心的（話し手へ向かう）」環境において、受け手への強制的な関与を表すことが可能になっているが、「利益」や「被害」を受けるというよりも、話し手の言表事態に対する心的態度の表明である。間接関与構文のモダリティ性を価値判断（評価）的モダリティの一種として、「利害性のモダリティ」と位置づける。

第7章では、日本語の補助動詞における複数の文法カテゴリーの連関を論ずる。まず、テ型補助動詞のシステムを俯瞰し、各文法カテゴリーが補助動詞の中で実現される原因を本動詞の語彙的意味から求める。テシマウ・テオクのようなアスペクト表示の補助動詞にともなうモダリティ性（主観化）と、受身や授受などのヴォイス表示にともなうモダリティ性（主観化）との比較を行う。補助動詞各形式の文法化の度合いの差異について、「求心性>遠心性」「物理的求心性>時的求心性」

という、二つの「主観化制約」にまとめる。

### 3. 本論文の評価

#### 3.1. 研究方法

本論文は、実質的な方向性を持たないテクレル文、実質的な方向性を持たないテクル文、間接受動文などを、類似する構文として「間接関与構文」とまとめるところに、独創性が認められる。従来の研究においては、個々の独立した問題として扱われており、日本語の談話スタイルの特殊性にむかう方向性が希薄であった。この問題について、日本語には、話し手中心の視点構図があり、価値判断をともなう談話スタイルがあることを示し得ている。

また、従来の研究では、適格性に疑問のある例文に基づき分析を進めることが多分に見られたのに対して、本論文は実際に用いられたところの用例に基づいて検討を進める。徹底したコーパス検索と SNS 検索により、実例に基づいた確実な議論を展開している点も評価できる。

本研究の対象となる、間接関与構文のグループは研究史が深いのが、丹念に先行研究を追い、学説を実例に基づいて検証しており、慎重な立論が行われている。基本的な論証が明快であるのみならず、注意点について注などにおいて十分な目配りがなされており、慎重に行論していると評価できる。

#### 3.2. 論文構成と論理性

間接関与構文は、日本語文法を特徴づける要素のひとつであるが、母語話者はなかなかその特殊性に気づかないでいる。本論文では、その成因を探るべく、ヴォイス・アスペクトに関わる構文の心理的な意味と特性を記述する。

第2章においては、授受構文が間接関与構文を形成することに着眼するが、テクレル・テメラウ型の方がテヤル型よりも間接関与構文を構成しやすいことを指摘する。授受には方向性があるが、求心型表現が遠心型表現よりも卓越する「非対称性」に着眼する。

第3章においては、同じく方向性をもつ心理的移動構文を対象とするが、ここでも求心型表現が遠心型表現よりも卓越することを見いだす。構文の差異をこえて同様の原理が働いていることを提示している。

第4章においては、間接受身構文を対象とするが、この構文自体、話し手にむかう求心型の表現である。そこには事態の主観的な把握が働くはずであり、日本語の語用論的原則として「求心性を心理的に運用する視点」が存在することを導き出している。

第5章では以上をまとめて、日本語の談話においては、事態に対する話し手の心理的な評価が付随するルールがあり、それが求心型の構文の卓越性を生み出すことを導く。異なるタイプの構文から、共通する原理を導き出す構成は堅実で、信頼性が高い記述となっている。

問題となるのは、談話に付随する話し手の心理的な評価の存在である。本論文ではこれをモダリティの一種と認定し、「利害性のモダリティ」と記述する。先行する研究において、未実現事態に対

する「評価のモダリティ」が提唱されているが、既実現事態に対してもそれは存在し、間接関与構文に付随する心理的意味として働くことを提唱する。これが、構文論でいう「モダリティ」と等質であるか否かについては、今後の検討を要するが、新知見として評価できるところである。

第7章では、ヴォイスを中心とした間接関与構文から発展し、アスペクト形式を主たる職能とするテ型補助動詞の構文にも、このモダリティ性の検証を行う。日本語のテ型補助動詞のシステムは「有・無」「動・静」「求心・遠心」によって整然と構成されていることを示し、アスペクト的意味にもモダリティが付随することを見いだしている。そして、そこでもヴォイス由来の間接関与構文と同様に求心性が遠心性に卓越することを示し、先述の日本語独自の視点構図の存在を補強するものとなっている。

以上のように、日本語においては、文法を運用するよりも、さらに上位の構造が存在することを示し、いずれの文法カテゴリーにおいても、それが機能することを、一連の問題として論述している。全体として一貫した主張が形成されているが、各章においては、一つ一つの実例の解釈から実証的に記述しており、信頼性の高い論理を構成していると評価できる。

### 3.3. 研究の意義と今後の改善点

間接関与構文の検討を通して、日本語においては、話し手の事態に対する評価によって、ヴォイス・アスペクト形式に心理的な意味を付与する機構があることを明らかにしたことは新知見であり、高く評価できるところである。従来の文法論的手続きでは、その存在を取り扱うことがむずかしく、それを語用論的規則として提唱したことも評価できる。

一方で、今後検討する項目があることも事実である。現在のモデルでは、直接関与構文から間接関与構文が成立するプロセスが想定されているが、歴史的な事実としてはどうであるか、考察の必要がある。また、間接関与構文にともなう心理的な意味を「モダリティ」と認定することについても、検討が必要である。モダリティは文法カテゴリーの一つであるが、語用論的なレベルで機能するそれを同一のものとしてできるかどうか、現時点では確定していない。これは日本語文法論において定説を見ないところではあるが、今後の進展を期待したい。

### 3.4. 全体評価

以上、本論文は、日本語の間接関与構文において、従来の文法研究をこえた語用論的研究として独創的なものであり、すぐれた研究であると評価できる。また、母語話者が気づかないさまざまな日本語の特異性を明らかにしており、日本語研究に新しい視点を提供するものと評価する。

よって、博士（文学）について合格と判断する。